

昭和四十七年三月二日発行

広島県史

広島県史

改訂版 広島県史 教授 編輯

している。妊娠の問題も特別の資料は出て来ていない。放射能を受けた婦人も健康な子供をもうけており、特に片輪の子供が多いという現象も見られない。問題はいわゆるやけどすなわちケロイド（蟹足腫）のその後の症状だが、すでに生長期および盛期を経過して、十月頃から減衰期に入っている。赤味もとれ、凸凹も平らになり赤紫の筋もうすくなり、痛み、かゆみ、むずむずした自覚症状も漸次減退しつつある。もうこうなれば安心して整形手術を受けてもよい。ここ数ヶ月のうちには安定期に入るだろう。医学的立場から見ても、原子症状は現在大体落ち着いたところだが、研究は今後とも継続し、将来原子力を平和産業に使用するときの重要な資料としたい。

四一 木村健二郎書簡（中山弘美宛） 昭和二〇・八・二八

中山弘美様
〔中山弘美氏蔵〕
木村健二郎

昭和二十年八月二十八日

前略 昨日御持参の広島試料の燐は放射能存在のものには微量ながら検出致し候へども他のものは存在を認められず候

但し之は硝酸可溶部についてのみの試験に之有り 詳細はいづれ弘藤分室に於て定量の上御知らせ申すべく候 尚昨日御尋ねの骨中の燐含量の件は正常人の大腿骨について次の如くに之有り候

	CaO%	P ₂ O ₅ %	MgO%	
	54.99	41.49	1.44	860 810 580γ/mg
	53.14	40.83	1.32	
	54.72	41.18	1.18	
No. 1	試料 0.22g			三ササ橋付近骨
No. 2	試料 0.20g			55倍の放射能 三ササ橋畔人骨102
No. 3	試料 0.20g			10倍以上の放射能 相生橋畔の馬骨
No. 4	試料 0.20g			100倍の放射能 似鳥解剖死体火葬 頭蓋骨 10倍の放射能

注 此の燐モリブデン酸アンモニウム中には、珪素、ヴァナデン砒素が試料中に存在すれば混入せる恐れあり。主と

してカルシウムとの分離を目的として分析を行へり。

四二 大橋成一書簡（井深健次宛） 昭和二八・五・三

〔大橋成一氏蔵〕

拝復 先生には益々御元気で御活躍の由、心より御よろこび申し上げます。小生は御蔭様で経過良好であります。長い疾患にて聊か閉口致し、平井先生のいろいろの事等をも想起して居ります。御見舞の御言葉を賜り厚く御礼を申し述べます。原爆症報告有難く受領しました。当時の救護、研究等の苦心が結実致しました事に対しまして先生に深く御礼を申し上げます。

唯先生の御指示の如く、当時の軍関係者の研究分担者の名前が掲載されて居らず、大学の先生方等のみの名があり、之のレポートが大学の先生方によって主になされた如く誤解される恐れがあると愚考致します。あの病理の項は小生と山科君の材料について小生が書いたもので三宅教授の材料は大学で発表され、こちらとは全然関係がありません。之等の誤解を避け、当時の軍の研究者の権威保持のためにも、元のレポ

ートにあった軍関係者の分担表の掲載こそ大切であり、之が割愛されたのは少し遺憾に存じます。小西先生とも相談致します。尚配布の件ですが、宮崎、中山（誠）、高田、神村（章）君宛等を決定致しました。先づは御礼旁々近況の一端を述べましたが、切に御自愛を祈って居ります。

〔注 元陸軍軍医学校教官大橋成一少佐（宇品陸軍救護病院副院長）が、同学校長井深中將にあてて昭和二八年五月三日付でされたはがきである。軍医学校の報告書について被爆当時の軍医学校教官の学問的な記録として残したい気持と、報告者の執筆責任の所在をあきらかにしたいという科学的良心をあらわす資料である。〕

四三 荒勝文策談話 昭和二〇・一〇・一七

〔清水栄氏蔵〕

「『アメリカのニュース・カメラマンと新聞記者の前で語った演説』：清水日記十二月七日の項より」

原子爆弾と核物理学

平成六年五月二十日

緋

606 京都市左京区

山石倉中大路町三五

清水榮